

天使のはしご

神山曉美

雨雲のきれ間から
天と地をむすんで光がおりてきている
そこだけ　ひとときわ鮮やかな彼岸花が
あぜ道を滴ってこぼれていく

フロントガラスの隅に
貼りついたままのぬれ落ち葉　ひとつ
カーラジオから流れる
昭和の歌を聴いていた助手席の父が
とつぜん思い出したように口をひらく

「五島・福江島沖を航行中
東方の上空に
妖しい火柱がたつのを見たんだ」と

ヒロシマの朝が裂けた日から三日後
船渠入りしていた駆逐艦^{ドック}が
ナガサキの港を離れて間もない頃という
父の記憶のおわりを占めている
あの年の夏の風景が
ワイパーの残した
扇形にひろがるこの視界と
どのように重なったのか

天使のはしご かわいい名をもつ光線は
さらに幾すじもおりてきて
つぎつぎと棚田を照らしだしている
稔りの波を黄金色に輝かせながら